

會



報

1966年3月

249

日本山岳会

冬山の遭難防止 —— に対する一意見 ——

富山在住会員の立場から

石黒清蔵

(613)

“山”をかかえた本県は、毎年山の遭難を迎える。そして為政者が其の立場から心配して遭難事故をなくそうとする気持ちは、大いに多とするものである。

然しこれを山へ行くもの、側から見るのと、遭難をば事故として取扱うもの、方から見るのとでは其の考え方が大いに違わらう事は誰しも思い及ぶ事だと信ずる。

若しこれを為政者が参考にされたら、条例とか何とかを考へるにしても、多少ニューアンスが違ってくるのではないかと考へる。以下これに関する日頃の考へを述べて見たい。

一、山へ行く人口が非常に多くなつた事は驚く程である。この内純粋登山を志さずものと、観光登山の部類に入るものと混在してはいるが、大雑把にいったとえ観光でも登山などするものはい、日本人である。私が問題とするのは冬山など危険な登山をするものをさすので、観光登山は大いに歓迎するのではないかと思うが、私をして、いわしむれば、このスタートから問題である。わが祖国日本人の永遠の生命を想うならば、探險心、冒険心、自然を愛する心は極力涵養し推進すべきで、危険を

危険としない為の前向きな姿勢態度こそ必要だ。立山は何万年か昔から聳えているが之をしも崇高な存在と考えずに観光の資源と思いつく者が多い。本県の文化のレベルを私は甚だ悲しむ。

二、遭難防止に最良且完全な方法があればとくに行われているが、どう考へた所で絶滅とはいかないし、それも天災人災とよくいうが大部分は人災である。その人の問題に天象気象と現地がからみ合うのであるが、登頂が運よく成功したにしろ“運よく”がなければ成功しないのと成功しなくても運に左右されないものを見極めたい。みすみす危険を知りつつ、箔をつける為とか、はばをきかせる為とか、一かばちかを試みるものがある。之は山の邪道であり、後進性をあらわす話だと思ひ、一面この場合日本人が戦後フヤケたかフヤケていないかのポイントになる。

三、登山の歴史、遭難史を読む事は登山を志さずもの、要件である。殊に本県については大正十二年一月の松尾峠遭難、昭和初頭剣沢小屋ナダレ事件等は必読の書である。名を掲げるのは誠に失礼ではあるが、横、三田両先輩の当時

の壮烈なる行動心境を知るものとして、深く敬意を表するものであり、郷土では今もって誰一人尊敬しないものはいない。此頃一部のものがやつたか見たかで大物をねらうらしいが、“柔”の言葉を借りるまでもなく人が出来れば技も出る。山“だけ強いという事は私にはあり得ない”と信じている。

だからバランスも何もないつまらん計画、従つて登山は論外というべきで、数年前の某大学の遭難など防止条例にも何にも該当しない。

四、池ノ谷は兎角よく問題になる。小窓、池ノ谷を多少知っているものとして一言すれば、あゝいう所に行く季節が問題だ。悪い場所プラス悪い季節。之は悪い季節の方が悪いので場所は迷惑な話。一帯に観光に忠実な人々ほど悪い面を公表したがらないが、気象地理学上裏日本では、一、二月は最大多雨(雪)の時期、若し登山を主にするならば、元日に登頂を頑張らず、休暇に拘泥せず、三月、五月、十月を選ばれたい。ナダレの研究ならば又其道途があらうというもの。今のところ一晩に四、五メートルも降られては一寸手が出ないのである。

五、最後に県が山岳を開発しこれをもって世に益せんとしているのであるが、防止条例など考えるところを見ると、まだまだ安心ならない。今日立山開発、T・K・A、

山小屋、頂上施設等、山岳会、山岳界では不勉強、不熱心、不親切であると、判定するのは遺憾ながら事実であらう。これはわれわれにも大なる責任があると思うから、少し位きつい言葉でも致し方ない禁止する様な方向には断然反対する。高校生も千メートル、二千メートル級は、生活技術として必要であり、若しよき指導者さえ得れば、人格形成上最もよい方法であると確信するものである。経済成長は誰人にも判り易く人気はあるが、人間養成は瞬時も忽がせに出来ない喫緊の要務であらう。

改めて遭難者就中遺族の方々に厚なる敬意を表し、その間の教訓は充分汲み取って繰り返さない様にし、遭難を迷惑と思わぬで、果費をもつて救助捜索、収容等に理解ある措置を希望するものである。(完)

目次

- 山の遭難防止……………(石黒清蔵)……………一
- 槍ヶ岳登山の文献と解題(Ⅱ)……………二
- 六十周年記念集会(山梨・信濃)……………二
- 続日本のアルピニズム……………三
- ……………(安川茂雄)
- ニュージランド登山集会……………四
- 世襲会員覚え書……………(松田雄)……………四
- 福田庸雄氏……………(望月達夫)……………六
- 東京支部懇話スキー行……………四
- 支部情報(東京)……………四
- 会務報告……………五
- 新入会員……………六
- 会員住所変更他……………七

槍ヶ岳登山に関する 主要文献抄並びに解題

山崎 安 治 編

三、早期登山に関するもの

○Mountaineering and Exploration in the Japanese Alps, Weston, W. 1896 J. Murray

一八九一年、九二年槍ヶ岳を目指して頂を極めた紀行が第二、第五章にある。一八九一年(明治二十四年)は雨で登れなかったが、彼は槍ヶ岳の第三登を目指したと書いている。

○槍ヶ岳探険記(小島鳥水)「山水無尽蔵」所載 隆文館 明治三十九年

明治三十五年夏岡野金次郎とともに震沢岳を越えて上高地から槍ヶ岳登山の紀行。山尖りて峻しければなり、とその登山の動機を述べる。

○飛騨山脈早期登山者坂市太郎とライマン翁(小島鳥水「櫻松の匂」)所載 書物展望社 昭和十二年

明治十八年農商務省技師坂市太郎による槍より双六、薬師への縦走について記す。

○槍ヶ岳の昔話(小島鳥水)「水河と万年雪の山」所載 梓書房 昭和七年

志賀重昂の日本風景論を回想し、またウェストンの「日本アルプスの登山と探検」を当時抄記した事情を説明。「日本アルプス登山小史」において天保四年津田六合庵の「槍ヶ岳日記」の広告に言及。

○槍ヶ岳からの黎明(小島鳥水)「アルピニストの手記」所載 書物展望社 昭和十一年

明治三十五年岡野金次郎との槍ヶ岳登山を回想する。

○南安曇槍ヶ岳(小島鳥水)「山岳」一

II

ウェストンの登山以来外人の槍ヶ岳登山者増加を記し、明治三十八年には英人ブルの登山があったと述べる。

○徳本峠と槍ヶ岳(河部白水)「山岳」一ノ三

明治三十九年八月上高地から日帰り槍ヶ岳の紀行。徳本峠で鳥水と行き違ふ。

○笠ヶ岳、焼岳、穂高岳紀行(林並木)「山岳」一ノ三

明治三十九年八月槍ヶ岳登山、蒲田から穴毛谷を経て笠ヶ岳登山、上高地より前穂登山の紀行。

○槍ヶ岳の巔(櫻谷繁峰)「山岳」三ノ三

明治四十年八月の槍ヶ岳登山記。槍ヶ岳、笠ヶ岳、常念岳などのスケッチを添える。

○穂高岳槍ヶ岳縦走記(鶴殿正雄)「山岳」五ノ一

明治四十二年八月前穂高より奥穂北穂を経て槍ヶ岳への初縦走記。五十分の一の概念図をえ、初めて穂高山群の全貌を明らかにする。

○飛騨山脈の縦走(辻村伊助)「山岳」五ノ一

明治四十二年夏上高地より槍、双六、鷲羽、鳥帽子の縦走記。のち「ハイランド」に収録。

○高瀬入(辻村伊助)「山岳」六ノ一

明治四十四年夏上沢を溯行し東鎌尾根に達した紀行。のち「ハイランド」に収録。

○谷より峰へ、峰より谷へ(小島鳥水)「日本アルプス第三巻」所載 前川文楽閣 明治四十五年

明治四十四年七月穂高、槍ヶ岳縦走紀行。鶴殿正雄に次ぐ二回目の縦走記。

○槍ヶ岳から日本海まで(田部重治)「山岳」十一ノ二

大正二年夏、木暮理太郎と二人だけで槍から剣岳大縦走の紀行。

○槍ヶ岳の思い出(茨木猪之吉)「山の画帖」所載 朋文堂 昭和34年

大正二年夏上高地に滞在していたころの思い出。槍ヶ岳と黄花草石楠の花のスケッチをそえてある。

○槍ヶ岳より穂高へ(伴野清)「山岳」一ノ三

大正五年七月鳥帽子、野口五郎、鷲羽、雲ノ平、薬師、黒部五郎、双六と縦走し、槍からこれまでとは逆の穂高への縦走を初めて記録する。

○槍ヶ岳を中心として(福沢桃介)「ダイヤモンド」社 大正十三年

大正十三年著者が燕から槍に登った紀行をまとめ、茨木猪之吉のスケッチ十枚を付す。

60周年記念集會 ——最終報告——

山梨支部は、山岳会創立六十周年を記念して、十一月十三日、本部より望月達夫、加藤泰安の両氏を迎えて記念講演会を甲府市立図書館ホールで行った。

あいにく、富士山での遭難に人をとられて集まるもの少なく二十七名であった。

山梨支部、早川安治副会長から祝辞があり、本会支部顧問の大沢伊三郎氏から草創期の本県登山のあらましが話された。

そのあと、加藤泰安氏は、例によってユーモアたっぷり、適切な例えをあげて、「登山界と登山人」と題して講演を試みられた。

山登りは技術ではなく、どううけとめるかが問題であり、真剣なデッサンが必要である。技術というものは、文明の利器に守られている者が、その利器から離れたときの身の防衛措置である。

次に、望月達夫氏は、「山岳・編集裏話」と題して、「山岳」発行の歴史から始まって最近の内容に及び、最近号は海外登山の記録が九割をしめるようになった。これについては種々批判はあるが、日本人が初めて登った山の記録はどうしても無視できないので載せている。国内のものとしては、ある山の登山の歴史とか、古い山案内人の列伝といったものを古い岳人に書いて貰うものがあるが、五回六回催促してもなかなか書いて貰えない現状である。

「山岳」は会員に対する一つのサービスである。その表わし方として、追悼欄は欠くべからざるものである。永い間山登りをしている、他の社会ではともかく、有名無名を問わず、故人にむく意味で「山岳」に載せることは大切なことであると思っている。

このあと、加藤氏の撮影された、西イラン中央高地探険行のスライドを上映、記念講演会を終った。

技術のみに走るのはカタワの登山者である。山は危険が眼の前にあり、性格、体力、経験を分母として行動し常に安全限界の確認をおこなうてはならない。そしてグッドマナー、フェアプレイで山登りをしてほしい、と最近の世情と登山界のあり方についてはなされた。

次に、望月達夫氏は、「山岳・編集裏話」と題して、「山岳」発行の歴史から始まって最近の内容に及び、最近号は海外登山の記録が九割をしめるようになった。これについては種々批判はあるが、日本人が初めて登った山の記録はどうしても無視できないので載せている。国内のものとしては、ある山の登山の歴史とか、古い山案内人の列伝といったものを古い岳人に書いて貰うものがあるが、五回六回催促してもなかなか書いて貰えない現状である。

「山岳」は会員に対する一つのサービスである。その表わし方として、追悼欄は欠くべからざるものである。永い間山登りをしている、他の社会ではともかく、有名無名を問わず、故人にむく意味で「山岳」に載せることは大切なことであると思っている。

このあと、加藤氏の撮影された、西イラン中央高地探険行のスライドを上映、記念講演会を終った。

翌日、あいにく天候は悪かったが、会員の提供により車に分乗して、長駆秋色深い野呂川渓谷を訪れた。途中から吹雪となったが、広河原小舎に到着した。ひそかに持参したものは、倉の酒樽から約でくみだして来た、甲斐駒ヶ岳のふもと、台ヶ原の銘酒「七賢」である。大いにメロトルを上げ、山の語らいに楽し一時を過ごし、無事夕方帰甲し六十周年記念行事を全て終った。

遠来の講師の方々にその労を心から感謝するとともに、新しい会の前進を誓う次第である。(山村正光記)

◇信濃支部◇ ——乗鞍岳——



台風二十四号中部地方を横断、当地信州はその真只中に入り、吹荒れ、道路は各所で崩れて開催が危まれたが、どうにかバスが通れるという情報に、予定より一時間も遅れて九月十八日十一時松本駅前を出発した。一路といえど勇ましいが、さにあらず、ようやくにして開催地乗鞍岳に向ったのである。私達は今日はどうしても行かなければならなかった、というのは、果境地帯一周踏査の最終コース安房峠乗鞍岳の間を歩いている高山、佐藤、蒲生、穂川の四名が、今日の夕方乗鞍岳の小屋に到着するという知らせが入ったので、皆で迎えなければならなかったからである。

予想に反して鈴蘭までの道は台風による被害もなく、いつもの登山道と変らず快適に進んだが、乗鞍山道も三本滝辺りから、台風による風倒木が出はじめ、先導の自衛隊員の協力で、鉈で枝をおろしたり、ロープで引張ってどうにか通つていったが、ついに冷



随想

—大島さんを中心として—

日本のアルピニズム (IV)

安川 茂雄

さいきんは年令のせいから余り感じられなくなったが、昔十代のころ、町子コンプレックス[※]といったものを私は屢々胸におぼえた。母方の里にあたる隅田川の待乳山の下で私は少年時代のほとんどもを送り、終戦直前の三月十日のB29の空襲で戦災にあうまでくらしただけから、下町ッ子[※]といえるのである。

ことに父は信州の生れであったが、母は商家でなで一層下町的な日常であったし、まだ私の時代(昭和十年前後)にはどことなく山の手の生活と下町的なそれはかなり明瞭に区別されていた。すくなくとも私にはそう感じられ、下町にくらすサラリーマンの家庭という特種な状況であったためによりつく印象づけられたのかも知れない。

ところで大島さん芝の西久保桜川町の町中で育ったのだからかなり下町的であったはずである。いま桜川町へでかけてみては旧大島宅は、どこであつたのかはつきりしない。しかし大体住所の番地にあたる辺りはビルなど建っているが昔はかなり家屋の密集した

下町的なところに見える。つまり大島さんが、町ッ子[※]であることだけはたしかに私にはおもしろい。

そうすると私には、町ッ子[※]に一つの特異のタイプのあるのを発見するのだ。隅田川の兩岸あたりに生れ育ち江戸の趣味をいやおうなしに日常かいていた幼年時代をすごしたとよくおられる、例えば芥川龍之介とか谷崎潤一郎(喜八)さんなどに感じる一つの傾向である。見方によっては、エキゾチズムとか、いささかハイカラでベダンティッシュな、およそ下町的とは異質な資性がある。

それは私が、町ッ子コンプレックス[※]といったものの対照的なもので、私の胸底ふかくに潜在する憧憬といつてもよいかも知れない。つまりアリストクラシイでシックなものへのやみがたいまでの羨望であり、同時に生活的のほうはなりきらない者の嫉妬めいた感情である。大島さんの青春にも私はそんな、下町コンプレックス[※]があつたのではないかと思う。

旧年末頃さんにいただいた手紙によると、大正六年の夏、はじめて新人の大島さんたち商工部(中等部)の生徒をつれてリッターで常念か槍へ縦走なされたとき、どうにも手のつけようのないヤンチャな生徒であった。その後、横さんは渡欧されたが、帰朝の船中でふと図書室の雑誌に山の文章の出ていたのが目について読まれたところ大変な名文であった。そこで筆者はとみると「(慶応義塾山岳会々員)で大島亮吉とある。

ん同様に大島さんの面目は躍如と描かれていた。

むしろ、町ッ子[※]としても大島さんの時代と私の時代では時代的にかなり隔りがあるのだが、大正、昭和につづく戦前の生活意識というものはそんなに変りがあるものでなく一脈相通じるのではないだろうか。

ここで私の指摘したいのは、登山趣味またはアルピニズムというものが、アリストクラシイ的な香気をはなれ、異国趣味的な性格を感じさせるといふことだ。おそらく山の手で育った人には、なんでもないような日常的些細なことが、私たちにはひどく新鮮であり好奇に眼にうつるのである。

例えば洋書が本棚にならんでいる家庭とか、英字新聞をよんでいる父親とか大学生という存在、ベーターペンやパッパなどの洋装レコードのある書斎などめくるめくような世界に少年の日の私の眼には映つたのである。後年になって私が大学の仏文科をでたのも、そんなコンプレックスのはたらきからかも知れない。

はつきりいって大島さんの家は、両親ともインテリではなかった。それでも家が専売制以前のタバコ商だったから、いくらかハイカラであつたかも知れない。父親は富山の八尾の人だし、母親は茨城の鹿島の土族の娘だ。丁度私の父が自動車で、朝はリプトン紅茶に木村屋のパンをたべていたと同じくらいハイカラであつたので、到底英字新聞をよみか、葉巻やパイプをくわえていたといつた父親ではなかったと想像される。

大島さんが山に惹かれた理由の一つを私は、このような、町ッ子[※]のもつコンプレックスに由来しているのではないかと推定するのだが、そればかりではないだろう。あきらかに有力な原因ではあるが、すべてではない。

■泉では二抱えもあるやつに出会い、小一時間費やして、ようやく片付け位ヶ原へ向つた。昨日の台風の影響で、すっかり山は秋のけはいが濃くなり紅葉の盛りであつた。

三本滝で風倒木を整理中に十石岳附近を通過中の高山隊と無線通話が出来た調とのこと、バス組もうかうかしではいられないと、一同張切つたことであつた。

一同肩の小屋前まで待つうちに強風とガスをついて、高山支部長以下隊員元氣な足とりでやって来る。拍手と歓呼の中を到着、誰かれとなく握手、山岳会長および果知事より贈られた花束を手渡す、隊員はうれしそう顔をしていた。

隊員には一休み願って歓迎会場つくり、肩の小屋の清静な骨折りでホテルに準備が出来た。隊員を正面に一同勢揃い、黒根光課長、安曇村々長、松本自衛隊幹部等を来賓に迎えて、山登りにまつたけがまし集りである。踏査報告と、お祝いの言葉も終るか終らないうちに、祝宴が始まる。

象の巻を言がら無でるようにとつもない計画を無鉄砲にもやつたせい、か、酒の廻りが早かつた。皆で夜の更けるのも忘れて話しに花が咲く、それにしては忘れがたきそうだった。台風でそれられた北信の仲間、東京から来てくださったことになった松方会長や加藤泰安氏達が列車が不通でないいいだ。来

しかし、当時のアルピニズムがふくんでいた高度の教養的な場としての行為は、大島さんを山に近づけた大きな動機といえそう。

つまり、アルピニズムが選ばれた少数の者による極めて次元の高い趣味であり、スポーツとしてのみ律しえない、多元素的な要素をもった行為であつたこと、その要素には、西欧的な広範な哲

ればよかった、東京方に信濃支部のいいのよいところを見てもらへたのに。

明けて十九日乗鞍岳の頂上で完成式だ。完全ではなかったが一応計画はやりとげた、もはや計画から解放された気安さでゆっくりとした足とりで頂上へ向う。秋晴れの頂上で御神酒をいただき、四方の山々にとけとばかり万歳を三唱して式を終り、秋の太陽を背に受けて乗鞍岳を後にした。(堀内記)参加者

(来賓) 長野県観光課長、観光公社次長、安曇村々長、松本自衛隊副連隊長外十余名。

高山忠四郎、小里頼忠、佐藤貢、蒲生明登、井口謙司、堀内章雄、浅輪幸久、矢崎源市、中野和郎、穂刈貞子、早乙女綾次、小林俊樹、河西弥一、清次澄、百瀬寿雄、高橋貞利、宮沢功、百瀬道文、篠田謙、西牧康、朝倉雅美、大井猛、堀正嗣、遠藤忠一、小山俊雄、松本市観光課山岳部、吉武正子。

★地 震★ 小池 文雄

月に飛んで行く今日、僅か数軒の地下のことがわからぬとは地震の学問も随分なばけていてつくづく感じます。有成果無成果に七〇、〇〇〇回に垂んとしています。別に苦にもしていませんが世間並に驚かないと、周囲に義理が悪いような気がします。

(長野県松代町六八七)

学、芸術、宗教といった近代的教育性をなにかしらそなえていたことは見のがしえない。

山を行為し情熱をいだくことが、そのままたらから行為者自身への問いかけとなり、教養を必要とする思考体系を意識せざるをえないところにベル・エポックのアルピニズムの充実があつたと私は思いたいのである。(未完)



◇ ニュージーランド

登山集会について◇

この度一月十三日付にてニュージーランド山岳会ウエリントン支部のHon SecretaryのK.B. Pophewell氏から一九六六年のクリスマスから一月六日にかけて、同支部の主催でHopkins Valleyに於けるclimbing meet、同時期にニュージーランドの南アルプスを訪れる日本山岳会のメンバーがいたら、招待したいとの手紙が届いた。Hopkins Valleyはニュージーランド南島のNorth Otagoにあり、簡単な岩登りから、困難な雪と岩登りのルートに至る広範囲の登攀ができる素晴らしい場所であり、ニュージーランド・アルパイン・ジャーナルの一九五六年号に詳しく紹介されている。

後程計画の詳細と Application form が送られてくる由、御参考迄にお知らせします。
(松田)

西丸 震 哉

六重唱団員募集

六十周年記念講演会やテレビなどで御存知の方もあらうが、今回メンバーの若かりや必要なので、画期的な新人の募集をする事になったから、有志の人は葉書で申込むこと。

資格、読書力十分で音程正確、山登りを好み、週一回(夜)の練習に中目黒に確実に参集できる男女。
(申込) 目黒区中目黒三の一〇九、祐天寺ハイッパード 西丸震哉宛

世襲会員覚え書

松田 雄一

世襲会員という名称が正式にある訳ではないが、親の会員章、会員番号を子供に引継いでいる例が本会には過去において若干ありました。この点について、去る一月十三日の理事、評議員会の席上、定款改正の件に関連して議題になり、従来からある特例は、そのまま存続するが、今後は原則として認めないことに決まりました。

現在会の原簿にはこの種の会員が、三名確認されております。

丹念に会員名簿を調べられた方は五六番の神津得一郎氏、三一九番の木暮友枝氏、三七六番の津田誠氏が何故永年会員にならなかったかと疑問をもたれたことと思います。

そこでこの際、何故父系継続が行われたかという経緯について御紹介し、はっきりと会の記録にとどめておきたいと思ひます。尚若し他に該当者がございました場合には、事務所まで御連絡下さいますようお願い致します。

まずその第一号が会員番号五六番の神津得一郎氏です。このたび、レジスターの原稿からその間の経緯がはっきりと判りましたので同氏の原文をそのまま御紹介致します。

「明治三十四年生まれ私が、創期会員であるというのは如何なることですか?という質問を山岳会関係の方からよく受けますので、その経緯を次に書いておきます。私の父は島崎藤村氏の関係で同氏と小島島虎氏の紹介で、創立のときに、日本山岳会に入会しました。信州に住んで自然の風物を楽しみ旅行が大変好きでしたが山らしいものは神津牧物、荒船山(明36・5)、浅間山(明36・9)に登った位ですが、秋山郷

視察(明38・8)、大平峠越え(明39・3)、木曾御料林視察(明40・1)等の記録もあります。大正の末に父に代って私が山岳会へ入りたいと思ひましたが、会員番号が新しくなるのが惜しいような気がして、会員の父子継続というのではできぬものかと考え、父から会の幹事に尋ねてもらいました。それに対して、たしか高野鷹蔵さんから、英国山岳会にも左様な例があるようだから自分ではよろしいと思うが、なおほかの人にも相談してみろ、という意味のハガキ(探したが見当たらず)をいただきました。それと前後して越後の高頭仁兵衛さんから次のような書状をいただきました。

「……、猶ほ、会員名義変更の件は異存も可有之候へ共、小生は貴下が御名義御改正と心得候て、会員章を御子息の御名義に改め可申候哉、御子息の御名を御通知願上候御返事申上候処、不着と存候。依て御通知被下候はば、九月上京の折会計に参り原簿訂正可申候。大正十五年七月二十二日。(この手紙は保存してあります)」

次が、会員番号三一九番、木暮友枝氏。申す迄もなく木暮理太郎元会長の上亡人であります。

他の一人は会員番号三七六番の津田誠氏です。この番号は一九一四年十二月に入会され、昭和二年に亡くなりました津田素彦氏の番号ですが、亡くなられた前年の昭和二十四年にミナムツマジクという三七六番のよい番号を是非息子の誠氏に継続させたいという素彦氏の希望を当時の理事会が承認して統説を認めたものです。従って強いて入会年をつけるとすれば、神津氏は大正十五年、木暮氏は昭和十八年、津田氏は昭和二十四年とすべきでしょう。

東京支部 懇親スキー行 報告

たまには雑踏の東京から逃げだして山の中で懇親会をやらうではないかという事で、久しぶりに去る二月五・六の両日に日光で懇親スキーパーティーを開催した。

あいにくPRに手違いがあつて定員の四十名に達しなかったが、それでも三十九名の有志が集まつて、二月五日土曜日の午後、車のラッシュにもみくちゃにされながら牛歩の如きペースで東京を離れていった。

最近、入会されたスペインのソベニア神父、英国大使館勤務の英国人ホーラーさん、来日中のシエラ・クラブの会員である米人グレン・コンヴァースの三外人が参加して、ながらインスターショナル・パーティーの感で、車中では英語談義からロシヤ語までとび出す有様で、知能指数の至って低い我々では中々話について行けないといつたところ、日頃の勉強不足を今更ながら痛感した次第である。

日光の街中を過ぎて、いろは坂にさしかかる頃は、日がとつぷり暮れてしまひ、やがて月光に照らし出された雪の戦場ヶ原を過ぎて光徳ロッジへたどり着いたのが七時を少し過ぎた頃であつた。

光徳ロッジは東武経営によるもので数年前に竹中工務店により建てられ、会員松本龍次郎さんがそのため何ヶ月か出張されていたこと、落ち着いた雰囲気、女性向きのロマンスマードに溢れたロッジといったところ。

全員がダイニングルームに集まつて参加者中の最年長者、といつては甚だ失礼ですが、十九世紀生れの足立源一郎さんの首頭で乾杯。ただし「今夜の

パーティーをより楽しくするために」という註釈がついて、引続き晩餐に移った。食後、ロビーに場所を変えて、例によつて、会員勝田さんの玄人顔負けのマジックショーを披露。いつものことながら、すっかり胡麻化されてしまい、賑やかな笑聲がいつ果てるともなく、折りから降り出した雪の中に消えていった。

明くる日は、西高東低の気圧配置となつて寒波襲来。気温低く終日雪。午前八時半光徳を出発して湯元グレンデへ。金精峠へ向かう、グレンデでスキー訓練に余念のない人、あるいはストイックにスキーの話を咲かせる人等々、三々五々各自自由にスキーを楽しんで午後四時湯元発、九時に出発点と同じ東京駅八重洲口に到着。(富田)

参加者 津村幸雄、津村幸枝、大沢文子、市川通英、滝田和子、寺田素子、大西英彦、勝田房治、内海皓也、秋野武子、永木喜美枝、真壁信江、斎藤トヨ子、十時頼子、菊地隆子、与野木玲子、大橋房子、田中幸子、清水亜津子、ソベニア、アドリアン・ホーラー、グレン・コンパース、足立源一郎、錦織保清、安部訓夫、野田耕一郎、折井健一、福岡、本多明子、助川淳子、助川清子、堤正夫、堤夫人、倉知敏、松島英子、小林明子、村井田博、鈴木郭之、関口周也、以上 (関口 記)

支部情報

東京支部

一月十一日(水)役員会

出席者 石原、沼倉、西丸、小味、関口、村井田

①報告事項

都岳連加入問題について……沼倉

②議事

①三水会を一月十九日に行なう

②「山の医学あれこれ」飯田 誠

(何)二月三水会は二月役員会で検討し

決定することにする

(イ)二月役員会では新旧役員の名簿について各人検討して頂いて頂き議題に上げる

(ロ)臨時支部総会(都岳連加盟に際して)は都岳連評議員会の決定を確

認した上で開催する
(ハ)一月理事会に於いて東京支部より理事を選出して頂くように議題として上げて頂くようにする

東京支部

二月二日(水)役員会

出席者 石原、沼倉、村井田、関口、西丸、鈴木、鈴木、小味、野萩、中、富田、芳野、松永、(評議員)折井、山下、金坂、錦織、網倉、佐藤久、安彦

1 報告事項

一月十三日(十五日開催のスキースクール会計報告

2 議事

(イ)二月十六日開催(三水会)の件

西丸震哉氏「インド博物誌」と決定

(ロ)山岳協会加盟に関する件

(1)東京支部総会(日時未定・於ルーム)を開催し、支部会員の承認を得て加盟すること。

(3)現在迄の経過を各支部並びに学生部へ報告すること。

(3)東京都山岳連盟に対しては、新組織による日本山岳協会の目的趣旨に関連した要望を行なうこと。

以上三項目を決議決定した。

(以上 松永)

会務報告

常務理事会

日時 一月二十八日午後八時

場所 辰沼医院
出席者 加藤、辰沼、村木、松田

飯野各常務理事

(1)昭和四十一年度予算案検討の件
経理担当飯野理事作成の予算案につき検討。

昭和四十年年度については実質的には各種基金を取出すことにより、運営できたが、四十一年度は今年程度の事業を行なったとすると、会費を四〇〇円値上げしても尚四十五万円程赤字が生ずるので、再検討することになった。

日本山岳協会臨時役員総会

日時 一月二十九日午後二時
場所 山岳協会事務室

出席者 松方副会長、加藤、高橋専務理事、常務理事 辰沼、大塚、松田、鎌田、藤代、高橋(昭)理事、小島、高山、三井、山本、斎藤、鈴木、沢村、星野、羽賀、監事 藤井、以上十九名

議事(議長松方副会長)
(1)昭和四十一年度事業報告 高橋専務理事
(2)昭和四十一年度会計中間報告 鎌田常務理事

(3)会計監事監査報告 藤井監事

(4)各果加盟申込状況報告 藤代常務理事

(イ)加盟申込のあった果 28果
(ロ)加盟意志表示のあった果 11果
(ハ)加盟意志表示のない果 7果

各果休協を通じて加盟申込のあった、青森・山形・宮城・福島・新潟・千葉・栃木・群馬・埼玉・長野・静岡・岐阜・愛知・滋賀・石川・京都・大阪・和歌山・兵庫・福岡・長崎・宮崎・鹿児島

以上28果の加盟を承認した。

未加入の果については二月五日、第一回全国評議員会の開催に先立ち常務理事会を開き、正式加盟申込の果について審議した上で承認することにする。

(5)その他

二月二十三日に開催された全日本山岳連盟臨時評議員会の報告について高橋専務理事より説明があったが、役員増員等についての全岳連の要望事項はこの総会で決めるべき問題ではなく、第一回評議員会で決めるべき問題であるので参考意見として聞くことにした。

尚二月二日に常務理事会を開き、本日役員総会の議事録を確認、協会としての今後のスケジュール、分担金評議員数等についての案を準備すること決める。

日本山岳協会第一回評議員会

日時 二月五日午後二時(五時)
場所 日体協五〇一室

出席者 各果より一名の評議員二十九名、旧役員より、武田会長、松方尾関副会長、加藤、高橋(昭)専務理事、辰沼、大塚、松田、鎌田、藤代、高橋(昭)各常務理事、山本、小島、星野、羽賀、鈴木、沢村各理事、植木監事、その他

開会に先立ち常務理事会を開催して新たに、大分、東京、神奈川、熊本、香川、山梨、三重、島根、徳島、富山の十都果の加盟を承認、加盟総数三十八果中、出席二十九果、委任状出席六果、計三十五果出席により、評議員会の成立が確認された。

1 開会の言葉 高橋(定)専務理事

2 会長挨拶 武田会長

3 議長選出 武内重雄氏を選出

4 経過報告 加藤専務理事

5 議事

(1)分担金額および評議員数の決定。
一五〇団体以上 五万円。五人
八〇〜一五〇 三万円。四人
四〇〜八〇 二万円。三人
四〇団体以下 一万円。二人

(2)役員選出
これに先立ち規約変更の動議がで

て、第九条の役員の種類の項を理事・常務理事・評議員を各々若干名と改正することを可決。次いで役員選定委員会を決め、(各プロックより一名)選定委員会により次の様に選出された。

○会長 武田久吉
○副会長 尾関 松方、今西(錦)小島(北上海中)

伏見(北海道)、荒川(東海)、武内(近畿)、岡本(中国)、松永(四国)、諏訪(九州)、東北、北陸、関東地区については後刻、地区より推薦

○推薦理事 各果より一名
○委嘱理事 加藤、辰沼、大塚、高橋(昭)藤代、沢村、本田、石田、篠崎、植木、羽賀、大井・綿貫・白井以上十八名(理事の任期については五月の定期評議員会である)

○監事 藤井・山口
(3)新会長挨拶 武田久吉
(4)今後の協会運営
(イ)41年度定期評議員会について
(ロ)40年度の特別事業について
(ハ)全日本登山大会について
以上を以て第一回の評議員会を閉会し、引続き理事会を開催、高橋定昌氏を専務理事に、推薦理事18名全員を常務理事として互選し、閉会した。

二月理事・評議員会

(三日・ルーム)

出席者 松方会長、渡辺副会長、理事 加藤、辰沼、大塚、松田、住吉、川崎、杉浦、田村、宮下、評議員 吉沢村井、石原、中田、監事 野口、松本東京支部 沼倉委員

(以下委任)三田副会長、理事 川上評議員 藤島(敏)、小原、高山、青木折井、野口、今西(寿)、日高、藤木

で、第九条の役員の種類の項を理事・常務理事・評議員を各々若干名と改正することを可決。次いで役員選定委員会を決め、(各プロックより一名)選定委員会により次の様に選出された。

○会長 武田久吉
○副会長 尾関 松方、今西(錦)小島(北上海中)

伏見(北海道)、荒川(東海)、武内(近畿)、岡本(中国)、松永(四国)、諏訪(九州)、東北、北陸、関東地区については後刻、地区より推薦

○推薦理事 各果より一名
○委嘱理事 加藤、辰沼、大塚、高橋(昭)藤代、沢村、本田、石田、篠崎、植木、羽賀、大井・綿貫・白井以上十八名(理事の任期については五月の定期評議員会である)

○監事 藤井・山口
(3)新会長挨拶 武田久吉
(4)今後の協会運営
(イ)41年度定期評議員会について
(ロ)40年度の特別事業について
(ハ)全日本登山大会について
以上を以て第一回の評議員会を閉会し、引続き理事会を開催、高橋定昌氏を専務理事に、推薦理事18名全員を常務理事として互選し、閉会した。

二月理事・評議員会

(三日・ルーム)

出席者 松方会長、渡辺副会長、理事 加藤、辰沼、大塚、松田、住吉、川崎、杉浦、田村、宮下、評議員 吉沢村井、石原、中田、監事 野口、松本東京支部 沼倉委員

(以下委任)三田副会長、理事 川上評議員 藤島(敏)、小原、高山、青木折井、野口、今西(寿)、日高、藤木

で、第九条の役員の種類の項を理事・常務理事・評議員を各々若干名と改正することを可決。次いで役員選定委員会を決め、(各プロックより一名)選定委員会により次の様に選出された。

○会長 武田久吉
○副会長 尾関 松方、今西(錦)小島(北上海中)

伏見(北海道)、荒川(東海)、武内(近畿)、岡本(中国)、松永(四国)、諏訪(九州)、東北、北陸、関東地区については後刻、地区より推薦

○推薦理事 各果より一名
○委嘱理事 加藤、辰沼、大塚、高橋(昭)藤代、沢村、本田、石田、篠崎、植木、羽賀、大井・綿貫・白井以上十八名(理事の任期については五月の定期評議員会である)

○監事 藤井・山口
(3)新会長挨拶 武田久吉
(4)今後の協会運営
(イ)41年度定期評議員会について
(ロ)40年度の特別事業について
(ハ)全日本登山大会について
以上を以て第一回の評議員会を閉会し、引続き理事会を開催、高橋定昌氏を専務理事に、推薦理事18名全員を常務理事として互選し、閉会した。

二月理事・評議員会

(三日・ルーム)

出席者 松方会長、渡辺副会長、理事 加藤、辰沼、大塚、松田、住吉、川崎、杉浦、田村、宮下、評議員 吉沢村井、石原、中田、監事 野口、松本東京支部 沼倉委員

(以下委任)三田副会長、理事 川上評議員 藤島(敏)、小原、高山、青木折井、野口、今西(寿)、日高、藤木

で、第九条の役員の種類の項を理事・常務理事・評議員を各々若干名と改正することを可決。次いで役員選定委員会を決め、(各プロックより一名)選定委員会により次の様に選出された。

○会長 武田久吉
○副会長 尾関 松方、今西(錦)小島(北上海中)

伏見(北海道)、荒川(東海)、武内(近畿)、岡本(中国)、松永(四国)、諏訪(九州)、東北、北陸、関東地区については後刻、地区より推薦

○推薦理事 各果より一名
○委嘱理事 加藤、辰沼、大塚、高橋(昭)藤代、沢村、本田、石田、篠崎、植木、羽賀、大井・綿貫・白井以上十八名(理事の任期については五月の定期評議員会である)

○監事 藤井・山口
(3)新会長挨拶 武田久吉
(4)今後の協会運営
(イ)41年度定期評議員会について
(ロ)40年度の特別事業について
(ハ)全日本登山大会について
以上を以て第一回の評議員会を閉会し、引続き理事会を開催、高橋定昌氏を専務理事に、推薦理事18名全員を常務理事として互選し、閉会した。

議事

(1)定款改正の件
①終身会員 本会に入会後五ヶ年間に在籍せる個人会員にして所定の終身会費を納めた者。促し終身会費は左記の通りとする。(会費省略)

②家族会員 会員の配偶者、ジュニアを家族会員とする案については、常務理事会に於て成文化し、次回理事、評議員会で検討することにする。

③入会年度の刊行物について
定款第七條にある入会の「当該年度は年会費を免除する」というだけでは不十分で、具体的に明記しておく必要があるという、日高名誉会員、望月評議員等の意見にもとずき検討した結果、入会年度は年会費を免除して、会報のみ入会の月より頒布することにし、山岳を希望する者は別に二割引の実費で購入して貰うことにする。

④その他
評議員 各支部長の意見をも参考にして三月の理事会迄に、常務理事会で成文化しおくことにする。

(2)昭和四十一年度予算案検討の件
(飯野)

飯野理事より昭和四十一年度の実行予算に対する実績並びに、この実績に基いて作成された四十一年度の予算案につき説明あり。これによると、明年度の支出は、運営管理費、七二九千円、事業費、六九〇千円、予備費、一〇六千三百円、計六、四八二、千円に達し、一方収入面は、事業収入、六、七〇千円、雑収入、二、三〇千円、繰越、一、四六千円を見込むとして、入会金、会費による経常収入は、五、三三六千円を要し、年会費は最低二割は、値上げする必要があることが強調された。

(3)会費値上げの件
①入会金 五、〇〇〇円

(飯野)

(4)入会金

(5)入会金

(6)入会金

(7)入会金

(8)入会金

(9)入会金

(10)入会金

(11)入会金

(12)入会金

(13)入会金

(14)入会金

(15)入会金

(16)入会金

②年会費

- (イ)東京、神奈川、埼玉、千葉各
県の在住者 二、〇〇〇円
(ロ)右記以外の地域に在住する者

の値上げ案を総会にかけることを決

(4) 昭和四十一年度役員改選の件

(加藤)

加藤理事より、常務理事会案を説明し、意見が求められた。尚正副会長との任期は65～67年であり今年は改選期ではないが、従来の任期にこだわらず三～四年で変るべきであるという意見もあり、再検討されることになった。

(5) 日本山岳協会臨時役員總會報告

(加藤)

(6) 藤木顧問の件

記念祝賀

パーティーの席上、藤本顧問は名譽會員に推挙されたので、顧問の任を解いては如何かという意見が、検討の結果、顧問には任期はないので名譽會員に推挙された時を以て、自動的に退任願うことになるのが當然で、今迄事務的にこの手続をとらなかつたことは事務局の手落ちであり、早速文書をもつて連絡することにした。但し評議員は任期があるので、新たに名譽會員に推挙された日高、藤島、神谷各評議員は次回通常會員總會迄任期を務めて戴くことを確認する。

(7) 各支部報告

(中)

県内の一本化に時間がかゝつたが、一月末に、富山支部、県岳連、高体連、大学の四本の柱で富山県山岳協会が発足することになった。

②東京支部

検討、

た結果、都岳連加盟の問題は、支部として加盟の方針であるが、重要事項と考えられるので二月十九日に臨

時支部総会を開いた上で正式に決めることにした。

③ 関西支部

(住吉)

関西地区は協会問題では特に問題
 となる点はないが、多府県に亘つて
 いる関西支部自体の加盟は、新協会
 の諸問題がはっきりしてから決めた
 い。

(8) 其他

①君島氏遭難に際しての立替金は諸雑費三九、〇〇〇円をのぞきすべて精算された。（飯野）

②台灣問題、最近

たので、この件は台湾に關係のある折井、小味氏と相談の上、会と

③西武百貨店での六十周年記念展覧

開催の件

西武デパート

方要望があったので、六月十一日
と二十二日と決める。

④ ニューシ

(松田)

⑤ 巡回理事

五

福田庸雄氏

会報第二四四号の一五頁を見ると、
會員計報として一八八三番、福田康雄
(二四五号にて庸雄と訂正済)となつ
た一行出ていた。私はこの人のことを
調べたいと思い、古い「山岳」を繰つ
て氏の入会が昭和十六年二月であり、
紹介者は木暮理太郎、冠松次郎氏であ
ることを知り得た。

そこで冠さんに先日手紙を上げて福田氏のことをお尋ねしたら、折返し同氏から次のような返事に接したので、ここにご紹介しよう。

拜復 御手紙拝見致しました。庸雄と
いうのが正しいと存じます。故中島久
万吉氏（元商工大臣男爵）を中心に山
のグループがありまして、福田庸雄、

吉阪俊造、三田尾松太郎、田島勝太郎の同好者が集まると時々懇談会をしておりました。それに木暮理太郎、田部重治、私など招かれて一夕の歓談をしたことが二、三回ありました。私は福田さんとは山に行ったことは、あまりありませんでした。戦前愛鷹山脈を縦走して東海道の原へ行ったことがありますが、この時には福田さんはお嬢さんまつとて吉阪、三田尾氏と私と、須山の渡辺徳逸氏が先導で愛鷹山荘に泊り、翌日越前岳から愛鷹山稜の峯を鋸岳、三枚嶺などを通り、位牌岳から愛鷹山頂の桃沢神社に詣でそれから約二里の里道を通って原駅に出て帰京したことがありますが、これは相当の強行でした。

その後日本山岳会の集会で二、三度お目にかかりましたが、最近では年賀状の交換位でした。それで計報に接して驚いた訳です。

福田さんは、穏やかなよい人柄の入
でした。まことに惜しいことをしまし
た。当時丸ノ内の鉄鋼連盟の重役をし
ておられたと覚えています。

尚、会員吉阪隆正さんの親父故吉阪俊造さんと福田さんとは親しくしておいでの方ですか、その方へおききになると、何かと聞き出せるかと思えます。以上

冠松次郎

私はまだ吉阪君へ書を呈してないが同君がこれを読んでくれたら、何かと書いてくれるのではないかと心待ちにしている。

「山岳」を編集していて、私の氣をくばることは、遠逝された会員のこととを、できるだけ記しておきたいということである。これには多くの会員の協力があつて、はじめて達成できるところだ。このことをこの機会に改めてお願ひしておく。高令の冠さんが早速返書を寄せられたことに對して厚く御礼申上げる。

（望月達夫）

あかね書房山岳図書の新企画！

世界山岳名著全集

全12巻

フールス判箱入
本文8ポ口綴付 各六八〇円

責任編集 吉沢一郎・横川文雄・安川茂雄

「日本山岳名著全集」に続いて贈る世界の名著！

■第一回配本 6月中旬！

T・ヒーベラー／横川文雄訳（版權取得・本邦初訳）L・ランベール／安川茂雄訳

⑨ マッターホルンの暗い壁／山に闘う

■第二回配本 7月中旬

F・S・スマイス／吉沢一郎訳（本邦初訳）

ギド・レイ／青木枝朗訳

② 野心と栄光の人（ウィンパー伝）／マッターホルン

■第三回配本 8月中旬

カスパレック／尾崎賢治訳（本邦初訳）

ウエルツェンバッツハ／高木正孝訳

⑥ アイガー北壁に挑む／北壁集

マ以下詳細は来月号に発表いたします。

全岳人の要望にこたえる新しい山の本！

ケルン叢書 ①

新刊 佐伯富男著

あるガイドの手記

北大OBであり立山の名物ガイドの痛快きわまり

ない山の日記！遭難救助の裏話など岳人必読書

4月末発売、フールス判箱入 予価五五〇円

以下続刊

松本龍男著 奥山 章著／小森康行写真
初登攀行 岩と雪の登攀技術

好評 発売中

日本山岳名著全集 全12巻①⑦の巻絶賛発売中
挑戦者'65 アルプス登攀の記録―増刷出来―A5判箱入価八五〇円

あかね書房

東京都千代田区西神田2の19／振替東京 64150／電話東京 (262) 0371～4

御願

会報二四七号八頁で御

Number 中、次のものを削除します。

156, 157, 158, 200

登山における
人体工学追求の
勝利！！

画期的な新製品

シャモニー

キスリング

株式会社 サクライ

TEL (861) 0933-5 (851) 3356-8



昭和四十一年三月十日発行
東京都渋谷区神宮前
三ノ三二 外苑コーポ内
発行所 法人 日本山岳会
編集代表 吉沢一郎
電話 〇六五〇一
直通 〇七六五七
振替口座東京 四八二九番
頒価五十円
印刷所 株式会社 技報堂
東京都港区赤坂溜池五番地